

実践は楽しい

上うえ廣ひろ榮えい治じ

先月号では「実践を楽しむ」ということをお話ししました。「楽しくなければ実践ではない」とも申しました。そこで今回は、そもそも「実践は楽しい」ものなのだというお話をしたいと思います。

ある年配の会友がおっしゃいました。「歳を重ねるほどに、実践が楽しいという思いが募つってきました」と。たしかにそれは私も実感するところです。ただ、それは歳のせいではなく、倫理の実践は本来楽しいものであり、実践を重ねるほどに、ますます楽しくなってくるということだろうと思います。

なぜ倫理の実践が楽しいのかといえば、言うまでもなく、実践は人と人との愛和をもたらし、すべてがより善くなっていくからです。心が磨かれ、心が広くなってくるからです。それが大自然の摂理に沿った最も自然な生き方であるからです。

では、古人は実践をどう思っていたのだろうかと気になって、実践の大家、孔子こうしの『論語』の索引を見えますと、なんと十四回も「楽しい」とか「楽しむ」ということに言及していました。

索引を頼りに、その十四か所を拾い読みしてみたところ、孔子が「楽しい、楽しむ」ということをとても大切にしていたことがわかって、励まされたような嬉しい気分になりました。そこで皆さんにも、そのいくつかをお知らせしたいと思いい立ちました。

それは、『論語』の冒頭から、すでに現われています。有名な「学んで時にこれを習う、またよろこばしからずや。朋あり遠方より来たる、また楽しからずや。人知らずしてうらまず、また君子ならずや」（学而第一）です。

もちろん私は、これを実践倫理になぞらえて読み込みます。そして、深くうなずいて納得するのです。実践倫理的に読むと次のようになります。

「実践倫理を学び、時には復習して実践する。そのたびに理解が深まり、自分のものになっていく。これが実践の喜びというものです。また、実践の日々を送っていると、志を同じくする人がやってきて実践について語り合う。何と楽しいことでしょう。人はさまざまですから、私たちを受け入れない人もいますでしょう。しかし、それに心を動かすことはありません。それが実践者というものです」

びたりと意味が通ります。「朋あり遠方より来たる」は、大会や研修会などで会友同士が再会して、実践の実がこう上がったなどと語り合う時のことです。つまり孔子も、私たちと同じ思いだったのでしょう。

この同じ篇の少しあとにも、「楽しむ」が出てきます。弟子の子貢が孔子に尋ねます。「貧乏はしているけれど卑屈ではない。富を持っているけれど傲慢ではない。そんな生き方はどうでしょうか」

孔子が答えます。「なかなかよろしい。しかし、貧乏であっても道義を楽しみ、富を持っていても礼儀を好む生き方には及びません」

ここで大切なのは「楽しむ」ということを、受動的な喜びではなく、積極的な生き方をする喜びと捉えて

いることだと思えます。何かを与えられて喜ぶのではなく、自分から、楽しいと思う生き方を貫こうとする態度、それが真に「楽しむ」ことだと教えているのです。

『論語』の「雍也第六」には、「楽しむ」が、受動的なものではなく、自発的なものであるということが、もつとはつきりと示されています。

孔子は言います。「賢なるかな回や」、弟子の顔回は本当に偉いね。弁当箱一杯のご飯に椀一杯の汁で、狭い路地裏に住んでいる。普通なら、そんな侘しい生活のやるせなさに我慢ができないだろうに。ところが、「回やその楽しみを改めず」、顔回は自分が楽しみとする生き方を貫き通している。顔回は本当に偉いね。

顔回は孔子の一番弟子です。では、その顔回が「自分の楽しみ」としたところとは何であつたのでしょうか。いうまでもなく、正しい生き方をする事です。それを、楽しみにしていたのです。

私たちの場合であれば、「その楽しみ」とは、倫理の実践ということになります。私たちは、どのような状況にあつても、倫理の実践という「楽しい」生き方を貫いて、変えようとはしないのです。

この少しあとに、また「楽しむ」が出てきます。

「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」（雍也第六）

これも有名な言葉ですから、ご存じの方もおられるでしょう。「これ」を「実践」に置き換えて読むと、とてもわかりやすくなります。「これを知る者」とは、実践についての理屈や理論を知っている人、理解している人のことです。そんな「実践を知る者」は、「実践を好む者」、実践に意欲を持って取り組んでいる人、好んで実践をしている人にはかないません。

しかし、「実践を好む者」も、まだ実践という生き方を自分のものにしていないわけではありません。実践が好きで、実践をしようと努力している段階なのです。ですから「実践を好む者」も、「実践を楽しむ者」、

つまり実践がすっかり身につけていて、日々の実践を楽しんでいる人にはかなわないのです。

そのすぐあとでは、さらに論を進めます。

「知者ちしやは水を楽しみ、仁者じんしやは山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は楽しみ、仁者は寿いのちながし」

ここまでの流れからすると、「知者」とは、正しい生き方、倫理の実践という生き方を楽しむ人のことになります。人生とは、一瞬もとどまることなく動き流れる水のようなものですから、知者はその流れに応じて正しい生き方を貫きつつ、生き生きと活動します。つまり「知者は動き」、そしてそれを「知者は楽しむ」のです。

ところが実践を楽しむ「知者」のさらにその上に「仁者」がいるというのです。こちらは時間を超越して山のように動かない永遠の真理、我が会でいう大自然の摂理と一体になった「真の実践者」だといってよいでしょう。だから何事にも泰然たいぜん自若じじやくとして「静か」であり、自然のままに寿命まことを全うすることなのです。このくだりは解釈のわかれるところですが、私は、そう読み解きます。

私たちはまだまだ、日々の実践を楽しんでいる「知者」の段階にとどまっているようです。

孔子先生においてさえ、「心の欲するところに従えども矩のりをこえず」（為政第二、心のままに行動しても倫理を踏み外すことがなくなった。つまり、大自然の摂理と一体となった「仁者」に至ったと意識したものは、最晩年の七十歳のことだったのです。

私はすでに、孔子の最晩年を過ぎてしまいました。しかし、我が会や人の世の未来を思つて時に心を動かしつつも、実践を楽しんでいる現在のあり方を、よしとしたいと思うのです。

実践を楽しんで生きているうちに、やがては大自然の摂理と一体になる時もくるであろう。私はそのように、素直に信じることにしています。